# 関西地域のオペラ活動 2023

大田美佐子

## 1. 概括：オペラ上演拠点としての劇場、四半世紀の重みとその「活動」

2023年の関西オペラ界での話題のトップは、なんといっても関西地域のオペラ界を牽引してきた滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールが1998年の開館から25周年を迎え、芸術監督の沼尻竜典も16年を終えて退任、阪哲朗へと引き継がれたことである。地域を超えて国内外でも話題となるような、数多くの名舞台を生み出してきた滋賀県立芸術劇場びわ湖ホールの存在とその価値は、上演作品や傑出した音楽家たちへの賞賛のみならず、運営や専門の舞台技術者、指揮者の育成、加えて聴衆を育て、地域社会に貢献してきた「オペラ活動」としての重みがあらためて高く評価される。とりわけ、そのリーダーシップを担ってきた芸術監督の沼尻竜典の功績は大きい。その有終の美を飾ったのは、びわ湖ホールでのリヒャルト・ワーグナー10作品目となった《ニュルンベルクのマイスタージンガー》。ひとつの劇場で一人の指揮者が主要の10作品を指揮するのは本邦初の快挙でもあり、日本のワーグナー上演にとっても意義深く、ワーグナー作品の世界を関西地域に見事に定着させ、劇場自体にとっても充実した軌跡の証となった。

### ワーグナーからウィーンへ

後継の阪体制の元年は、ウィーンで学んだ阪らしく、音楽の都ウィーンの香り高い珠玉の名作、モーツァルト《フィガロの結婚》、ヨハン・シュトラウスのオペレッタ《こうもり》が阪自身の指揮で、ヨハン・シュトラウスをオペレッタへの道に誘ったオッフェンバックの《天国と地獄》なども上演され、その新しい個性も脚光を浴びた。退任後にびわ湖ホールの桂冠芸術監督となった沼尻竜典は、オーケストラピットでオペラ上演を盛り上げてきた京都市交響楽団を京都コンサートホールで指揮し、演奏会形式ではあるがリヒャルト・シュトラウスの《サロメ》を上演した。11月にはボローニャ歌劇場の来日公演としてベッリーニの《ノルマ》が上演された。海外の劇場公演の受け入れは、聴衆や演者にとってのみならず、専門技術のスタッフの交流をはじめとした劇場同士の国際交流としても重要な意味を持つ。

兵庫県立芸術文化センターの佐渡裕プロデュースオペラも、ウィーン時代のモーツァルト作品《ドン・ジョヴァンニ》を上演した。上演前には原寸大のセットを体験できるワークショップも開催され、パンデミック時には叶わなかったオペラ上演とオペラファンとの交流が復活。本公演は、元メトロポリタン歌劇場首席演出家のデヴィッド・ニースのダ・ポンテ三部作の締めの演目でもあり、有終の美を飾るにふさわしい公演になった。2023年はみつなかオペラでも《フィガロの結婚》が上演され、本公演は2023年度の音楽クリティック・クラブ賞の本賞を受賞し、その受賞理由で「モーツァルトの音楽が持つエッセンスを鮮やかに表現し」たと絶賛された。

### 関西で迎える市民オペラ50年

2023年に50年を迎えたという日本の「市民オペラ」は、関西地域にとっても、プロフェッショナルとアマチュアの協働する場所として、オペラ上演を盛り上げてきた大切な

堺シティオペラ第37回定期公演《愛の妙薬》©ひかり写真室

オペラ活動である。2023年は大阪の堺シティオペラがドニゼッティの《愛の妙薬》、兵庫の伊丹市民オペラで《蝶々夫人》が上演され、芦屋市民オペラでは、兵庫を中心に関西地域のオペラ振興、人材育成にも深く関わってきた斉田好男の指揮で、フラメンコダンサーなど地元のリソースをふんだんに利用した《カルメン》を上演した。本稿で取り上げたこれらの市民オペラも20年、30年の長きにわたり、オペラが上演できる劇場が建設される以前から活動をはじめ、オペラ活動の草の根運動を担ってきた。大阪の堺を拠点に活動する芸術団体による「テアトロ・トリニタリオ Teatro Trinitario」(三者の調和を意味する)では、堺シティオペラと大阪交響楽団が、フェニーチェ堺で《こうもり》を上演。看守のフロッシュ役は能楽狂言方大蔵流の茂山千三郎が務め、関西ならではの配役でユニークな舞台となった。関西地域では、業界紙とも言える『関西音楽新聞』を中心に、市民オペラもプロフェッショナルと市民の協働の現場として、批評の対象として俎上に上がる。オペラ界全体にとって、「言論空間」が豊かに展開することはこれからの重要な課題でもあるが、市民のオペラ活動の足跡を記録し、公共空間でのオペラの楽しみを育むうえでも大切なことと言えるだろう。

**中小ホールの演目から開くオペラの万華鏡**

中ホールのオペラとしては、邦人作曲家や日本文学と結びつくオペラの上演が際立った。なかでも林光の《森は生きている》の人気は根強く、レパートリーとして数多く上演してきたびわ湖ホールのほか、兵庫県立芸術文化センターでは「日本オペラプロジェクト」として取り上げられた。関西歌劇団は、生誕100年を迎えた中田善直作曲の《泣いた赤おに》を取り上げた。《泣いた赤おに》は、びわ湖ホールが小学校の体育館など、地域の文化ホールで上演し、児童が参加できる形で上演された演目でもある。これら中小ホールのオペラ・レパートリーの演劇的な展開は、異なる演出の趣向によって、多角的な魅力と可能性を広げている。ザ・フェニックスホールでは、恒例のサロン・オペラとして関西二期会によりヘンデルの《ジュリオ・チェーザレ》が上演された。大阪音楽大学のザ・カレッジ・オペラハウスは、古典派のレアなプログラムを取り上げてきたが、2023年はモーツァルトの《劇場支配人》とアントニオ・サリエリのオペラ《はじめに音楽、それから言葉》というバックステージもので、かつジングシュピールとオペラ・ブッファという異なる様式で作曲されたダブルビルに取り組み、牧村邦彦の指揮、井原広樹の演出で、セミ・ステージ形式で上演された。また、京都文化博物館の別館ホールでは、三島由紀夫原作の《卒塔婆小町》が、フランスの作曲家、フランソワ・ファイトによる新作オペラとし

ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団第63回定期演奏会
《はじめに音楽、それから言葉》©大阪音楽大学

て、フランス在住のメゾ・ソプラノ小林真理の手によって世界初演された。

#### エンターテイメントと観光、オペラ界への広がり？

グローバルな視点で、エンターテイメントへの関心と観光とのつながりは、兵庫に芸術文化観光専門職大学が開校されるなど、あらためて大きな注目を浴びている。たとえば、世界遺産登録30周年を迎えた法隆寺でも、野外オペラ《トロヴァトーレ―吟遊詩人―》が上演され、報道でも話題になった。唯一無二の歴史的建造物の重厚な存在感とオペラのマッチングに感動する一般市民の声も聞かれ、劇場に加えて、関西エリアのオペラ上演の可能性を開いていくものになるかもしれない。

#### 巨星墜つ

2023年は、日本のオペラ界全体にとって、関西にとっても大きな存在であった演出家の栗山昌良と指揮者の飯守泰次郎の訃報もあった。栗山は、びわ湖ホールの《三文オペラ》(2012年)《死の都》(2014年)《竹取物語》(2015年)、兵庫県立芸術文化センターの開館間もない時期に《蝶々夫人》(2006年)などを演出、演出作品は話題を呼び、歴史的に意義のある上演と評価されてきた。飯守も欧州での豊富な経験から、ブルックナー、ワーグナーの演奏解釈には定評があり、常任指揮者、のちに桂冠指揮者となった関西フィルでは演奏会形式のワーグナーが特に高い評価を受けた。

2人の傑出した芸術家が、関西のオペラ界に与えたインパクトとレガシーは、未来の上演にも繋がっていくと思われる。

## 2. 2023年に行われたオペラ公演について

### 2.1. 関西二期会

第97回オペラ公演としてビゼーの《カルメン》が上演された(11月25・26日、吹田市文化会館メイシアター大ホール、フランス語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。関西二期会の前身、二期会関西支部の旗揚げ公演でもあったという縁の演目。読み替えがなくオーソドックスな三浦安浩の演出で、グイード・マリア・グイーダ指揮、大阪交響楽団の演奏する音楽が際立ち、「カルメン、ドン・ホセ、合唱、会心の出来栄え」(関西音楽新聞2024年1月 門田展弥評)という高評価を得た。同じ演出で岡山や愛知などの近隣地域の巡業が、鈴木恵里奈の指揮で行われた。また、恒例の大阪のザ・フェニックスホールでのサロン・オペラは20回を数え、ヘンデルの《ジュリオ・チェーザレ》が上演された(2023年5月16・17日、あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール、イタリア語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。ピアノ版で2時間の短縮版だが、音楽面での充実が高い評価を受けた。

### 2.2. 関西歌劇団

スプリングオペラでは、中田喜直の生誕100年事業として、中田歌曲のガラ・コンサートと共にオペラ《泣いた赤おに》が上演された(5月30日、兵庫県立芸術文化センター 神戸女学院小ホール、配役詳細は巻末に)。関西歌劇団の魅力は、一人一人の個性が際立つ、その演技力とも言えるかもしれない。演出のケーシーハシモトは批判的かつユーモア溢れる感性で児童文学の世界をアップデートし、音楽は關口康祐と岩本実姫による連弾のピアノとパーカッションに、語りと芸達者な歌役者たちが演じた。ラストに村人によって破かれる青おにからの手紙はこの演出の白眉。世界の計り知れない孤独と分断を想起させ、寓話を異化した問いかけの深い上演だった。また、秋には第103回定期公演で、マスネ《サンドリヨン》が上演された(9

月 16・17 日、吹田市文化会館メイシアター大ホール、フランス語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。ザ・カレッジ・オペラハウスでの関西の初演時にタッグを組んだ指揮の牧村邦彦と井原広樹の演出は美しく幻想的な舞台を創出した。「軽妙なオペラ・コミックでありながら、壮麗なグランド・オペラでもある。その匙加減は円熟した牧村の手腕によるところが大きい」と、フランス・オペラの上演の成果が高く評価された。(関西音楽新聞 2023 年 11 月号 横原千史評)

#### 2.3. 滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール

中ホールで上演される年明けの「オペラへの招待」では、沼尻竜典の指揮で、林光のオペラ《森は生きている》が上演された (1 月 26・27・28・29 日、びわ湖ホール中ホール、日本語上演、日本語字幕付、配役詳細は巻末に)。2001 年の上演の際に沼尻が依頼して作曲された室内オーケストラ版での上演は、幕が上がる前に観客と一緒に劇中歌のソングを歌うなど、「「うたごえ」をやっていた人には懐かしく、初めての人にも年齢関係なく楽しめる参加型の公演となった」(関西音楽新聞 2023 年 3 月号 横原千史評)。春のプロデュースオペラでは、ワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》がセミ・ステージ形式で上演された。(3 月 2・5 日、びわ湖ホール大ホール、ドイツ語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。「この曲特有の対位法的に錯綜したテクスチュアを精緻に音化した」と歌手をはじめ、音楽面での充実が評価され (関西音楽新聞 2023 年 4 月号 横原千史評)、公演全体として、「こうした充実したオペラ制作は一朝一夕に生み出されるものではない。ホールの会館から 25 年の歩みがこの大団円に連なっている」(朝日新聞 2023 年 3 月 23 日 小味渕彦之評) と総括した評も見られた。

10 月に新芸術監督に就任した阪哲朗が「オペラへの招待」に選んだのは、モーツァルトの《フィガロの結婚》。(10 月 7〜9・14〜16 日、びわ湖ホール中ホール、イタリア語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。オペラ初心者の若者には安価に、馴染みの薄かった人々にも良質でわかりやすいオペラを届けているこのシリーズは、びわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバーが主要キャストの一角を担う。今回は特に指揮者の阪がフォルテピアノも自ら演奏したことで、レチタティーヴォの表現の豊かさが際立った。名作だけに「上質の笑いと感動を生み出す手腕は並大抵のものではない」(関西音楽新聞 2023 年 12 月号 横原千史評) と芸術監督としての船出も高評価を得た。また年末には、オッフェンバックの《天国と地獄》が岩田達宗の台本、宮本益光の訳詞で、日本語で上演された (12 月 21〜24 日、びわ湖ホール中ホール、日本語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。一般市民からも合唱を募集したインクルーシブな魅力にあふれた上演は、原作の意図から世相の風刺を意識し、「岩田演出の舞台は、カラフルで上品で、爽やかな色気をふりまく」とそのセンスが高評価を得た (関西音楽新聞 2024 年 2 月号 横原千史評)。

また、3 つのホールによる共同制作のオペラ (滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール、東京芸術劇場、やまぎん県民ホール) では、ヨハン・シュトラウスの《こうもり》を取り上げ、阪哲朗の指揮に、演出は狂言師の野村萬斎を起用。「遊び心満載」(朝日新聞 2023 年 5 月 7 日) の企画は、日本語の台詞にドイツ語の歌、日本語と英語の字幕で上演され、大きな話題を呼んだ。(11 月 19 日、びわ湖ホール大ホール、ドイツ語歌唱、日本語台詞、日本語・英語字幕付、配役詳細は巻末に)。丁寧に作られた舞台をより多くの観客に、異なる地域でオペラ活動を誘うために行われる共同

制作は、ホール間の技術や人的交流にとってもかけがえのない価値を生み出している。

### 2.4. 兵庫県立芸術文化センター

毎夏の佐渡裕芸術監督プロデュースオペラでは、デヴィッド・ニースによる演出で、モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》が上演された。(7月14～17・19・20・22・23日、兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール、イタリア語上演、字幕付、配役詳細は巻末に)。20世紀半ばの中欧を舞台に、ロバート・パージオラの壮麗な舞台と衣装が圧巻。公演に先駆けて行われたワークショップでは、そのシックで迫力のある舞台セットを実際に舞台上で体験するツアーが行われ、観客を大いに楽しませた。歌手陣は海外組と日本組の布陣で4日ずつ8日の公演。それぞれの芸達者な歌手たちによるキャラクターの人物造形が素晴らしかったが、特にタイトルロールを演じた大西宇宙とドンナ・アンナ役の高野百合絵の好演が際立った。ドン・ジョヴァンニの地獄落ち後のアンサンブルの表現にはアンチヒーローの喪失感を重ね、「稀代の背徳の男の不条理な魅力の真に迫った」との評価もあった。(関西音楽新聞2023年9月号 村田英也評)。

10月には「古楽の愉しみ」というシリーズで、「バロック・オペラ・エヴォリューション」と題して、バッハ・コレギウム・ジャパン、鈴木優人指揮によるヘンデルの《ジュリオ・チェーザレ》が上演された。セミ・ステージ形式ではあるが、衣装でキャラクターを際立たせた演出は佐藤美晴、タイトルロールのティム・ミードやクレオパトラの森麻季などの卓越した繊細な声の技術を持つ歌手たち、オーケストラ、演出ともに充実した舞台で、近年の古楽の隆盛をあらためて感じさせた公演であった。

### 2.5. 堺シティオペラ第37回定期公演 ドニゼッティ《愛の妙薬》(1月14・15日、フェニーチェ堺大ホール、イタリア語上演、字幕付)

【指揮：柴田真郁、演出：岩田達宗、合唱指揮：岩城拓也、制作統括プロデューサー：坂口茉里、アディーナ：端山梨奈；浅田眞理子、ネモリーノ：小堀勇介；松原友、ドゥルカマーラ：片桐直樹；伊藤正、ベルコーレ：西尾岳史；桝貴志、ジャンネッタ：小川紗奈；大上りあ、管弦楽：大阪交響楽団、合唱：堺シティオペラ記念合唱団】

### 2.6. 第37回伊丹市民オペラ定期公演 プッチーニ《蝶々夫人》(1月29日、東リいたみホール(伊丹市立文化会館)大ホール、イタリア語上演、字幕付)

【指揮：加藤完二、演出：井原広樹、合唱指揮：岩城拓也、舞台美術・映像デザイン：増田寿子、蝶々夫人：中原加奈、ピンカートン：水口健次、スズキ：名島嘉津栄、シャープレス：湯浅貴斗、ゴロー：上辻直樹、ケイト：高谷みのり、ヤマドリ・神官：服部英生、ボンゾ：萩原泰介、ヤクシデ：田中崇由希、管弦楽：伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団、合唱：伊丹市民オペラ合唱団】

### 2.7. 第21回芦屋市民オペラ《カルメン》(2月5日 11:30～／16:30～1日2回公演、芦屋ルナ・ホール、日本語上演)

【指揮：斉田好男、演出：東平聞、合唱指揮：西牧潤、カルメン：中井美内子；ナムユカ、ホセ：竹内直紀；水口健次、ミカエラ：岡山真理子；藤田果苗、エスカミーリョ：塩入功司；迎肇聡、管弦楽：芦屋交響楽団、合唱：芦屋市民オペラ合唱団／芦屋少年少女合唱団、フラメンコ：スタジオNORA大阪(振付 向京子)】

### 2.8. 関西二期会サロンオペラ第20回公演 ヘンデル《ジュリオ・チェーザレ》(5月16・17日、あいお

いニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、イタリア語上演、字幕付）

【指揮：袖岡浩平、ステージング：奥野浩子、ピアノ演奏：前川裕介、ジュリオ・チェーザレ：影原真由美；味岡真紀子、クレオパトラ：田村香絵子；四方典子、コルネーリア：名島嘉津栄；岸畑真由子、アキッラ：片桐直樹；萩原寛明、セスト：山本伸子；瀬戸口文乃、トロメーオ：上野緑；髙木華奈、クーリオ：山咲響；萬田一樹、ニレーノ：椋本かおる；森原明日香】

**2.9. 関西歌劇団スプリングオペラ 松井和彦《泣いた赤おに》**（5月30日、兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホール、日本語上演）

【演出：ケーシーハシモト、赤おに：近藤勇斗、青おに：富永奏司、木こり：繁亮太、百姓：清原邦仁、女房：席定真弓、娘：野口麻衣、ナレーター：末廣早苗、ピアノ：關口康祐、パーカッション：横山堅司、賛助演奏：岩本実姫】

**2.10. 第32回みつなかオペラ モーツァルト《フィガロの結婚》**（10月8・9日、川西市みつなかホール、イタリア語上演、字幕付）

【指揮：牧村邦彦、演出：井原広樹、合唱指揮：岩城拓也、装置：アントニオ・マストゥロマッテイ、美術・映像：増田寿子、照明プラン：原中治美、音響コーディネイター：小野隆浩、音響：平井英一、衣裳：村上まさあき、舞台監督：青木一雄、伯爵：迎肇聡；東平聞、伯爵夫人：並河寿美；内山歌寿美、スザンナ：古瀬まきを；村岡瞳、フィガロ：松森治；西村圭市、ケルビーノ：伊藤絵美；高重咲智華、マルチェリーナ：大賀真理子；岸畑真由子、ドン・バルトロ：片桐直樹；武久竜也、ドン・バジリオ：松本熏平；中川正崇、ドン・クルツィオ：柏原保典；加護翔大、バルバリーナ：森千夏；長太優子、アントニオ：田中崇由希；西村明浩、管弦楽：ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、チェンバロ：梁川夏子、合唱：みつなかオペラ合唱団】